

- 8) 中村 伸、日暮愛一郎、大里敬一 (1996) Tissue Factor発現細胞としての顆粒球の新機能. 第58回日本血液学会、Int.J.Hematol. 63(Suppl.1): 295 (#760).
- 9) 平島 豊、中村 伸、遠藤俊郎、栗本昌紀、高久 晃 (1996) SAH後のCSF中組織因子とthrombin-antithrombin III complex濃度: SAHの重症度と予後の関係. 第55回日本脳神経外科学会.
- 10) 前田義久、相馬正幸、松浦一郎、笠倉新兵、中村 伸 (1995) 白血病におけるTFの解析. 第19回日本止血血栓学会、血栓止血誌 7: 356(#3).
- 11) 日暮愛一郎、轟木秀一、岡本好司、永渕幸寿、成田成彰、伊藤英明、大里敬一、中村 伸 (1996) 切除肝組織におけるtissue factor発現の検討. 第19回日本止血血栓学会、血栓止血誌 7: 356 (# 4) .
- 12) 小宮山豊、宗像真知子、香川英生、村上 卓、楢田 緑、野村昌作、中村 伸、福原資郎、高橋伯夫 (1995) 組織因子希釈プロトロンビン時間の意義と臨床検体への応用. 第19回日本止血血栓学会、血栓止血誌 7: 357 (# 5) .
- 13) 島田逸人、相馬正幸、前田義久、松浦一郎、笠倉新兵、中村 伸、加藤久雄 (1995) 妊娠時におけるtissue factor (TF), tissue factor pathway inhibitor (TFPI) の変動. 第19回日本止血血栓学会、血栓止血誌 7: 360 (# 11) .
- 14) 平島 豊、中村 伸、遠藤俊郎、桑山直也、成瀬優知、高久 晃 (1996) クモ膜下出血患者内頸動脈血中のPAF、サイトカイン、組織因子の変化. 第19回日本止血血栓学会、血栓止血誌 7: 427 (#145).
- 15) 轟木秀一、日暮愛一郎、岡本好司、伊藤英明、大里敬一、中村 伸 (1996) ウサギ胆管炎モデルにおける臓器障害に対するDEGR-VIIaの効果. 第19回日本止血血栓学会、血栓止血誌 7: 428 (# 148) .
- 16) 浅岡一雄 (1996) 抗マラリア薬クロロキンの酵素的分解. 平成8年度日本薬学会東海支部例会 (静岡), ファルマシア 32:1558.
- 17) 小林直子、小野聡、筒井通雄、浅岡一雄、成松鎮雄 (1996) サル肝上清画分による Propranolol 活性代謝物 4-

Hydroxypropranololの硫酸抱合反応における立体選択性—ヒト肝癌由来HepG2細胞との比較—. 第11回年会日本薬物動態学会 (金沢) .

ニホンザル野外観察施設

大沢秀行 (施設長・兼) ・東 滋
渡辺邦夫・足沢貞成¹⁾

本施設の運営は上記3教官のほか、森 明雄・鈴木 晃・山極寿一によって進められた。平成元年度の各ステーションの状況は次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島の群れは昭和23年以來の蓄積された資料をもとに、野外観察施設の中では独自の位置を占めている。主群のボスである老齡のノソ (29才) は、今年も健在でなおその地位を保っており、長寿記録を塗り替えてつある。昨年の冬は、渡り鳥のツグミやヒヨドリなどが記録的に少なかったらしく、全島的に木の実がずっと豊富であった。その影響であろうか、17頭 (内2は双子、1死産) の出産があった。特筆すべきことは、1972年に餌を減らして以來、1才以下の子持ちメスによる連年出産は全く見られなかったのが、今年に限って3例もあったことである。その後、11頭が死亡して新生児は6頭が残るだけであるが、自然条件が群れの繁殖に及ぼす影響の大きさをみせつけられた1年であった。なお双子の出産は、幸島では2例目である。また連年出産のチガヤの子が、生後5日ほどで子供をなくしたばかりのユズに誘拐され、そのままになってしまう事件もあった。なおチガヤの子はその後、3~4ヶ月で死亡している。主群とマキグループの間での、オスの交代があいかわらず頻繁に起こっており、2~3年前とは大幅に顔ぶれが交代した。平成9年3月の時点での島内の個体数はマキグループ12頭を含め90頭である。

天然記念物である幸島のサルを守るため、文化庁の指導の下「幸島猿生息地保護対策検討委員会」が定期的集まりをもち、「天然記念物『幸島サル生息地』保存管理計画書」を作成した。その基礎資料を得るために、昆虫や植物相などより総合的な調査が進められた。その結果、1970頃と比べると植生の変化がかなり大きかったことが分かつ

ている。今年度は、森によるマキグループのグルーピングのあり方や栄養条件とメスの性皮腫脹の関係、栗田博之による子供の性による死亡率の違いなどについての研究が行われた。

2. 下北研究林

昨年同様 I 群に由来する群れが、近年の分裂で何群になったのか、その行動域がどう変化したのかなどについて、12月下旬に一斉調査を行った。調査範囲は易国間川右岸最上流域の大石沢まで、また易国間から国道沿いを木野部峠まで踏査した。発見されたのは、釜の沢林道と甲ノ沢との間を複雑に動きまわっていた一群のみで50頭ぐらいであった。雪が少なく足跡がほとんどつかない人工林が点々と混じっているため、完璧とはいえないが、今回の調査区間の中には、この群れ以外はいなかったように思われる。6年前にこの区域でやった調査の際には、複数群が存在するという結果がでたが、現在では、昨年度と今年度見つけた50頭前後の群れ、一群だけが生息しているものとみなされる。

北海道大学の綿貫豊・中山裕理両氏は「ニホンザルの採食パターンとヤマグワの反応」というテーマで、M群を対象にして研究を行った。

3. 上信越研究林

冬季オリンピックを翌年にひかえ、周辺地域ではさまざまな環境改変が進行している。そうした中、ニホンザルの生息環境悪化が懸念されているが、人手不足から不十分な調査しか行えていない。一方地獄谷野猿公園では、今年度も個体数調節のために、多数のオトナメスを対象に避妊操作を行った。また分裂した1群をそっくり中国に送るなどして、個体数増加の抑制と猿害防止に躍起になっている。研究林周辺地域で相次いでおこる猿害問題や、野猿公園がかかえる諸々の問題を考える上では、非常に重要な例であろう。今後この地域の野生ニホンザル全体を見据えた、活動が必要である。

4. 木曾研究林

木曾研究林内のニホンザルの現状については、今年度も詳細な調査ができなかった。それは主として予算面および人的配置が困難であることによ

るが、いずれの群れも猿害のために継続的な捕獲対象となっており、群れの同定や連続観察が困難なためでもある。長野県では全県的なニホンザル分布調査が始められようとしており、この研究林周辺地域もその主要な調査候補地の一つとなっている。また平成8年3月には、この研究林の一部北西側が、新しく設定された「中央アルプス木曾駒ヶ岳森林生態系保護地域」に組み込まれた。急峻ではあるが東西にさほど奥行きのない中央アルプスの中で、研究林のニホンザルは保護問題を考える上では、ひとつの典型的な例として、貴重なものになるであろう。

5. 屋久島研究林

国割岳大川の中高度帯のヤクザルの分布調査が、好広真一(龍谷大)、大竹 勝(日本モンキーセンター)がリーダーとなり、約30人の調査員の協力をえて7月25日～8月10日の期間に行われた。田中俊明(日大)、古市剛史(明治学院大)らは、調査域を南へ拡大して B, NinaA, Hiendo群他の社会学的行動学的調査をおこなった。松原 幹(霊長研M2)がG群、Hiendo群、B群を対象に、大谷達也(名大農M2)が、川原地区(KWSA群、およびKWSB群の行動域)で、「森林植物に与えるサルの影響」について、早川祥子(霊長研M1)がB群を対象に「メスの繁殖戦略」についての調査をおこなった。古市他(明治学院大)は、春に若いオスの群間移動を追跡するため、入れ墨標識をつける作業をすすめた。

県道永田-屋久線(西部林道)の改良工事計画に関して、環境影響評価の補完(事実上の見直し)の作業が昨1994年度後半から進められている(屋久島事務所担当)。1996年度は工事計画区間のカンノン峠～半山2号橋までの2.5Kmのあいだに生息するヤクシカ8群を対象に調査が4期にわたって行われた(林勝治 宇部短大)。また同道路問題に関しての、“検討委員会”に、東が委員として加わっている。西部林道問題に関しては、研究所長名で鹿児島県知事あて、要望書を2月16日付けで提出している。

研究概要

A) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

東 滋・足沢貞成¹⁾

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、生存に必要な条件をあきらかにするため、屋久島と下北半島西部の地域個体数について継続的な調査を行っている。

B) 野生ニホンザルの保護および全国のニホンザル個体群に関するデータベースの作成

東 滋・渡辺邦夫

「ニホンザルの現況」研究会参加者らと協力して、野生ニホンザル保護のための方策を模索している。その一環として全国の野生ニホンザルに関するデータベースの作成、古分布の復元、ニホンザルに関する文献目録の作成などを行っている。

C) 熱帯多雨林の山火事後の回復過程に関する生態学的研究

東 滋

森林回復の過程でカリマンタンクタイ国立公園の山火事後の、霊長類を含む果実食性哺乳類の群集の消長、彼らが森林の回復にはたす種子運搬者としての役割などを調べている。

D) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡辺邦夫・山口直嗣²⁾・冠地富士男²⁾

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこったトピカルな出来事や通年の変化について分析を進めている。

E) 熱帯林における種多様性保存に関する研究

渡辺邦夫

熱帯林の保護と持続的な活用、また未知の有資源を探る目的で、インドネシアでの現地調査を行った。

F) 下北半島西北部の群れの遊動に関する研究

足沢貞成

下北西北域のM,I,Z各群ともニホンザルでは有数の広大な遊動域をもつ。その生態学的条件や個体群内部の構造などに焦点を当てて調査を続けている。

報告・その他

- 1) 渡辺邦夫、冠地富士男、山口直嗣 (1996) 幸島で記載された植物とサルの食物. 宮崎の自然 13:68-84.
- 2) 宮崎県申間市教育委員会 (渡辺邦夫、分担執筆) (1997) 国指定天然記念物「幸島サル生息地」保存管理計画書. pp.115.

学会発表等

-英文-

- 1) Watanabe, K. (1996) Recent trends of reproduction of Koshima monkeys. Intl. Symp. Evol. Asi. Prim. (Aug. 1996, Inuyama) Abstracts p.48.
- 2) Fujita, K., Watanabe, K., Widato, T.H., & Suryobroto, B. (1996) Species recognition in seven Sulawesi macaques. XVIth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstracts no.335.
- 3) Takenaka, O., Setyadji, R., Subryobroto, B., Watanabe, T., Watanabe, K., Kawamoto, Y., Hamada, . & Gotoh, S. (1996) Origin and Evolution of the Sulawesi Macaques: Sequence of Mitochondrial DNA. XVIth Congr. Intl. Primatol. Soc. (Aug. 1996, Madison, USA). Abstracts no.486.

-和文-

- 1) 渡辺邦夫、船越美穂、三谷雅純、荒金辰浩、Kunkun J.Gurmaya, I.Wayan A.Dirgayusa, Erri N.Megantara, Edy Brotoisworo (1996) インドネシア、パンガンダラン自然保護区における霊長類2種、シルバールトンとカニクイザルの個体群変動について. 第2回野生生物保護学会大会. 講演要旨集 p.36.

- 1) 教務補佐員 2) 技官

- 2) 渡邊邦夫、三谷雅純、荒金辰浩、Kunkun J. Gurmaya、I. Wayan A. Dirgayusa、Erri N. Megantara、Edy Brotoisworo (1996) インドネシア、バンガンダラン自然保護区におけるシルバールトンとカニクイザルの個体群変動について。第12回日本霊長類学会大会。霊長類研究 12(3):271.
- 3) 川本芳、竹中修、渡辺邦夫、浜田穰、後藤俊二、渡辺毅、B. Suryobroto (1996) *M. tonkeana* と *M. hecki* の雑種地域に関する集団遺伝学的研究。第12回日本霊長類学会大会。霊長類研究 12(3):257.
- 4) 後藤俊二、竹中修、渡辺邦夫、浜田穰、川本芳、渡辺毅、Bambang Suryobroto、Dondin Sajuthi (1996) スラウエシマカクの寄生虫叢の特徴、及びその血液性状。第12回日本霊長類学会大会。霊長類研究 12(3):300.
- 5) 藤田和生、渡辺邦夫、Tri Heru Widarto、Bambang Suryobroto (1996) スラウエシマカクの種の認知(3)-オクレアータとプルネスセンスの場合。第12回日本霊長類学会大会。霊長類研究 12(3):284.

サル類保健飼育管理施設

景山 節(施設長・兼)・松林清明・後藤俊二
 鈴木樹理・松林伸子¹⁾・三輪宣勝²⁾
 熊崎清則²⁾・阿部政光²⁾・釜中慶郎²⁾
 前田典彦²⁾・勝田ちひろ²⁾

平成8年度の施設の概要は以下のものであった。

- 1) 平成8年度の営繕工事として第2放飼場A区画の全面改修が行われた。土止め、植樹、日除け、保温ボックス、小川工事の他、桧材を使った止まり木工事など大幅な改修を行ない、サルの生息環境の改善という施設の進めている環境エンリッチメントを十分に配慮したものとなった。
- 2) ヒトに伝染するウィルスとして問題になっているBウィルスについて、サル委員会と合同で所内のマカクを主な対象に抗体保有状況を調査した。マカクとヒヒで抗体陽性が見られ、最も飼育頭数の多いニホンザル、アカゲザルでは各群で感染率が異なっていた。陽性ザルについて

は研究者に周知するとともに、今後ウィルスフリー化を進めるために具体策を検討することとした。

- 3) 前年度に引き続き施設の改組が概算要求の重点事項として提出された。名称を実験用サル類開発研究センターとし、教授配置による研究体制の整備および脳研究支援推進のネットワーク構築を中心としており、施設の発展のため早期の実現を目指している。
- 4) 高橋末年技官が平成7年度末で定年退職となり、後任に勝田ちひろが採用された。なお勝田技官は獣医師であり、サル類の診断・治療を主たる業務とすることにした。
- 5) 国立大学動物実験施設協議会の幹事校に霊長類研究所サル施設が選任された。同協議会の「イヌ、ネコ、サル問題対策小委員会」委員長に松林清明が選任され、活動中である。
- 6) COE招聘外国人研究員として来所していた朱本仁(上海動物園)が任期を終了して平成8年8月に帰国した。

- 7) 平成8年9月より固形飼料の成分を変え、栄養価を保ったままでの低コスト化を図った。
- 8) その他：年末年始の放飼場等の警備の予算が認められ、ガードマンによる夜間巡回が初めて行われた。サル汚水浄化槽の保守と定期点検が業者委託となった。

研究概要

A) サル類の生殖生物学的研究

松林清明

オス生殖機能の進化を生殖器構造の面から検討するために、主として大型類人猿の精巣微細構造の組織学的検索を進めている。各地の動物園で死亡したゴリラ、オランウータン、チンパンジーの精巣標本を収集し、造精機序の様態を見ている。

-
- 1) 教務技官 2) 技官